

ヴァンクーヴァーのすまいについて  
温哥華民居談議

池澤 優

早いもので、私がヴァンクーヴァーに来てから一年がたった。もともと出不精で、日本にいても北海道の土は踏んだことのない私のこと、当初見るもの聞くものがめずらしく、— などということとは全くなかった。驚いたことと言えば、片面が完全に腐食した自動車が平気で走っていることぐらいで、とりたててカルチャー・ショックと言えるようなものは想起することができない。留学された他の方はいかなる感想を持たれたか存じあげないが、これは現代文明の普遍性の表われなのかもしれない。このような状態で一体私は何を書くべきなのか。大学（ブリティッシュ・コロンビア大学）の様子などであれば、或いは読者の役に立つかもしれないし、「海外だより」の最初の意図もそのあたりにあったのかもしれない。だが、私はここで敢えてその方法をとらず、当地に於いて見た住宅の構造についての奇説、というよりも妄説をここで開陳してみたいのである。私がそう願う理由は、専ら、この夏に帰省した時に、これを語って批評をうける機会を持てなかったことによるものであって、公にする価値があるものとは全く思わないが、御容赦載きたい。

先にカルチャー・ショックの如きものは全くなかったと言ったが、当然、文物風俗の違いはあるのであって、その中で最も簡単に気がつくのは、建物、特に民家の作りであろう。なにしろ、会話を通さずに目で見ることができるのであるから。そして改めて日本の例を思い浮かべるまでもなく、民家の中には意識するとしないとにかかわらず、伝統的な基本構造がうつがれていることも確かであろう。

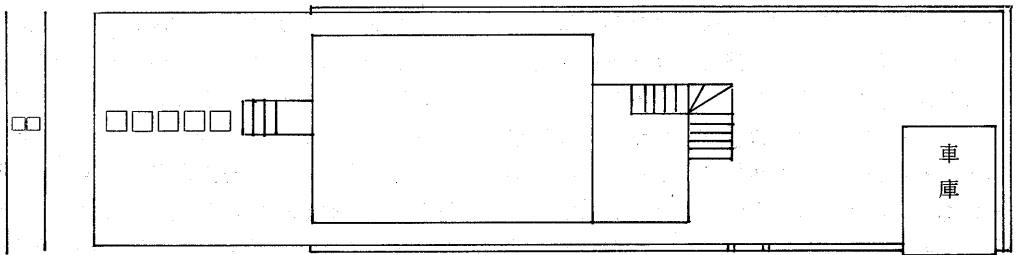
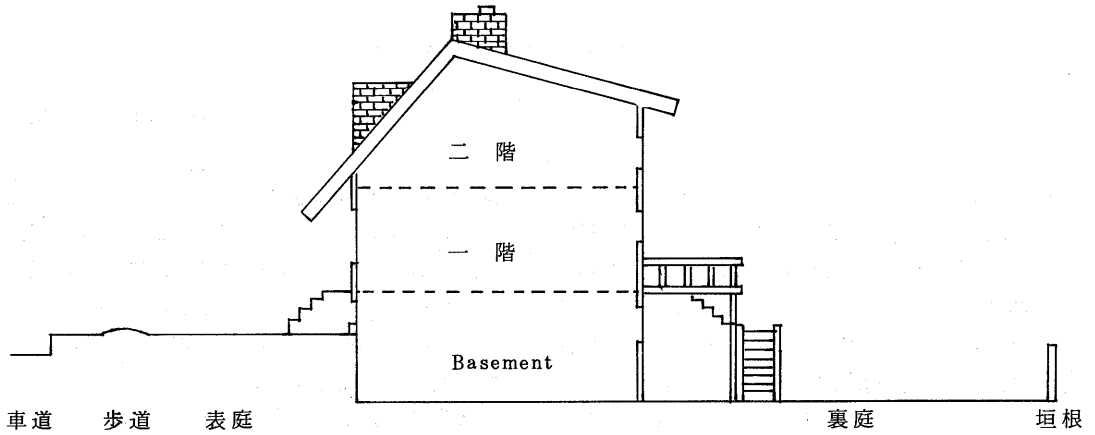
ヴァンクーヴァーの民家は各々が極めて个性的であるにもかかわらず、殆んどが幾つかの基本的要件を満足させており、それがどこか画一的なイメージを与えている。まず、表側に垣根はなく、歩

道から良く手入れされた芝の植わっている前庭を通して直接玄関に至る。玄関は必ずと言って良い程、大地と同じレベルにはなく、数段の階段を上らなければならない。階段は高いもので人の背丈くらいある。表から見ると、安っぽい感じで、あまり大きくは見えない。たいてい平屋、もしくは二階建てに見える。今安っぽい感じと言ったが、汚いという意味ではなく、どの家も小ざっぱりとしている。

しかるに、裏道に入ってみると、様相は一変する。どの家も必ずと言って良い程、垣根を持つ。たいていは木の板でできており、あまり手入れがゆきとどいていないため、どう見ても清潔なイメージを与えない。裏庭はかなり大きく、同時に裏側から見た住居もかなり大きく見える。三階建てが主で、木造四階建てなどと言うものもある。このトリックは殆んどの家が、basementと呼ばれる半地下式の部屋を持つことと、切り妻屋根の勾配が高いために、屋根裏に一階分とることができることに據る（図1参照）。各階の役割分担は、一階が客間・リビング・食堂・台所、二階が寝室で、これはほぼ例外がないようであるが、basementの機能はかなり多様性に富む。私が見聞した限りでは、小さな子供がいる場合は子供の遊び場（卓球台が置いてある例があった）、子供がいなければ下宿として人に貸す（これは極めて一般的）、また納戸・洗濯室・車庫として使う例もあるようである。

このbasementへの指向はかなり強いものがある。と言うのは、例外的ながらbasementを持たない家もある訳だが、そのような家は一階と二階の塗装をことさら変えていることが多い。例えば、私が今住んでいる所のすぐそばに、一階部分を煉瓦で、二階を白のモルタルにしている家があり、これは二階の方が本当の居住空間であるとの意識

側 視



俯 瞰

図 1

の表われであろう。また、普通のアパートにも basement を作っている例も多い。その部分には独立した一世帯が入るのであるから、これには何の意味もなく、ただ住みにくく、従って家賃も安いであろう一室を増すにすぎない。してみると、彼らにとってまともな住居には、この穴蔵のような部分が不可欠であるらしい。

更に不思議なのは、表には垣根がなく、裏にはあるという現象である。何故なのか現地の人に何回か聞いてみたが、答ははかばかしくない。「塀はない方がずっと良い。」「では裏庭のは?」「裏はないわけにはいかないから。」「何故?」「その方が安心だ。」泥棒等に対する用心のことを言っているのだろうか。しかし、一般に言って、垣根は御世辞にも泥棒よけになる代物とは思われない。むしろ、より象徴的な意味を持つように思

われる。文字通り、表と裏、建て前と本音の如き使いわけがあるのではないか。

前庭は垣根がないことによって、歩道（これは市の所有）と直接連結し、私有財産でありながら、公の空間となる。公空間は一枚のドアによって終り、私空間に移行する。が、実際には板一枚でこの移行を完了することは難しい。普通、玄関のすぐ脇に居間、または客間があるため、ドアが開けばまる見えだし、閉じていても窓ごしに結構良く見えるのだ。従って、一階のレベルは半ば公の空間とならざるを得ない。逆に言うと、一階に客間を設置して、塀を設けずにいるということは、自らの公開性を誇示しているも同じである。表側で失なわれた私的空間は裏側でとり返されねばならない。かくて裏庭の塀は彼らの閉鎖性を象徴する。もし、こう考えることが許されるのなら、表面的

な公開性と内実の閉鎖性の同時存在というアンビヴァレントな傾向（あくまで、私にはそう感じられるということ）が、塀という目に見える形になって存在していることになる。

となれば、basement の役割も比較的明白であろう。それは第一に「外」が扉一枚で「内」になるという状況 — つまり、日本の土間やタタキにあたる場所がない — を、「外」と「内」の境界領域を作ることによって改善する。第二に、それは家族のための私的空間であって — 寝室は個々のための私的空間であるのだから — 家族全体にとって娯楽の場となり得る。言いかえれば、その不確実性が人々に与える安心がbasementの最大の役割のように思われる。

今、ここでアンビヴァレンスということに言及したが、別にそれが当地の人々の特有のものということはあるまい。如何なる文化のもとでも、開放性と閉鎖性の共存は見られるに違いない。しかし、全く初対面の人に対し、数年来の友人であるかのように挨拶する彼らを見ると、その共存のし

方に何か特有のパターンがあるような気がする。住居をそのパターンのアナロジーとすることができるとは、実は全く自信がないが、人々の「外」に対する観念と反応が、住居の構造のなかにある程度象徴的に示されていることはあり得ると思う。例えば、中国の四合院建築は、中庭を中心に四棟の建物がそれを囲む形をとり、「外」に対しては極めて閉鎖的である。ただ、各々の部屋は中庭に対しては大きく開かれており、「内」に対しては開放的である。これは風水の思想に合致するだけでなく、自己の体内の気を循環させて外に漏らさないようにするとの道教の考え方にも似ている所があるのではないか。

さて、日本の住宅はどうであろうか。伝統的には、少なくとも家屋自体は開放的で、外側に塀を作って防禦しているといった感じだろうか。もっとも、狂気の沙汰としか思われない地価の上昇などの前には、家のつくりなど吹き飛ばされてしまうかもしれない。

妄言多謝。